

あらはたしおん
同じクラスの新畑詩音は

とても可愛くて

女子の友達も多い。

勿論、男子にも人気がある。

どうやら最近、超イケメンの

バスケット部の先輩と付き合ってた

やりまくってるらしい。

ブサイクの俺にとっては

こいつはクソビッチっぽくて

元々気に入らなかつた。

そして先日…

廊下ですれ違う際

少しだけ肩が

触れただけで

俺をゴミクズを

見る様に

睨みつけてきた。

許せん…

こいつには

エロ執行!!

俺の特殊能力を使って…

ギロツ

特殊能力と言っても

決して、催眠術や

透明化ができる訳ではない。

ただ単に対象の相手に

俺の存在の認識を

忘れさせるだけだ。

アッ...

?

ん?

んんん

だから、いきなり俺が
相手のカラダを揉みしだいでも
相手は暫く自分の身に何が
起きてるのか理解ができない。

もみもみもみ

あ、んんん

しゅ
しゅ
しゅ

そして、段々と
湧き上がる快樂と共に
俺の存在を認識し始める。

認識した時には理性は
ほぼ無くなっている為、

あたかも最初から
俺とのエロ行為を
許諾してたかのように…

すんなり彼女は、カラダを俺に委ねて
さらなる快楽を求めるようになっていく…



俺の自慢の肉棒を
見せれば、

すごい…

先輩のより
大きい♡

発情期の雌の如く
それを貪りつく。



本能を剥き出しにしたこの女は
自ら腰を振り、俺の肉棒で
膣内を掻き混ぜる……

見立て通り、やはり
この女はクソビッチだ。

もう、俺の自慢の肉棒無しでは

生きられないカラダになるだろう……

その後、新畑詩音はバスケット部の先輩と別れたらしい……

別れた理由は定かではないが、今でも新畑は俺の肉棒を度々、求めてきている。

俺のサボリスポットのひとつ
保健室。

ここのベッドで休む事が
学校での唯一のやすらぎだが、

ある日、いつものように
保健室に行くとき空きのベッドがなく
そこには同じクラスの
あかす赤須まりんが寝ていた…

赤須は男子はもちろん、
女子とさえ喋ってる所を
見た事ない
俺に負けず劣らずの
陰キヤだ。



こいつもよくこのベッドを
利用しているんだろう…
気持ち良さそうに
寝てやがる…

だったら…もっと
気持ち良くしてやるよ…

俺のやすらぎの邪魔を
しやがって…!!

エロ執行…!!



存在の認識を忘れさせる
俺のこの能力……
寝てる相手に絶大な
効果を発揮する。

このエロいカラダを
弄っても起きることは
めったに無い。

ん……

もめっ

もめっ

くりっ

くりっ

あっ♡

例え、途中で
目が覚めたとしても
快感を纏ったまどろみは
まさに「夢見心地」。
逃れる事は決してできない。

ん♡

完全に目覚めた時には
俺の自慢の肉棒によって
陰キヤとは思えぬ
エロい声で喘ぎまくり、

そして、
快感の奴隷と
化していく...

あーん♡
あーん♡

ずぶっ

ずぶっ

その後、俺が授業をサボる度
赤須は保健室のベッドで
俺の肉棒を求めてきて
結局、休む事は
できなくなってしまった...

うちのクラスの
学級委員長の西沢舞優さんは
誰にでも分け隔てなく
接してくれる聖女だ。

ブサイクで
陰キヤの俺に対しても
屈託の無い笑顔で挨拶してくれる。

明るい性格のアイドルのように
西沢さんは男女関係なく
とても人気があった…

だが…

先日…

幼なじみの男に
告白され、
まさかのOKをして
付き合い始めたらしい…
みんなの西沢さんは
もういない…

これは裏切りだ…

西沢さんも所詮、

発情を催すメスだったのだ。

エロ執行！

俺の能力で俺の存在の認識を忘れさせる・・・すると、西沢さんの悩の中では一時的に俺は居ないものと見なし教室で一人つきりと思い込む。

彼氏がまだ碌に触ってないこのエロいカラダを撫でまわすと西沢さんからしたら勝手にマ○コが濡れてきたと動揺をし始める。

?

えっ?
ん...
あ...
ん...

もみ

もみ

もみ

その動揺はやがて快感にすり替わっていく...忘れてた俺の存在を段々思い出していくと共に西沢さんのカラダは快楽を受け入れていく...

あ...
ん...
♡

くちゅ

くちゅ

俺の存在を完全に認識した西沢さんは俺の自慢の肉棒によるプレスをする度、今まで誰にも聞かせた事がないエロい喘ぎ声を解き放っていく……完全にメスとしての悦びを覚えたのだろう……

その後、西沢さんは彼氏と別れる事もなく交際は続いているらしい。ただ、俺とはセフレの関係が始まった。無論、彼氏には内緒で……



体育の授業中、誰も居ない校舎の裏でサボっていたら、^{ほしなあい}風紀委員の保科藍佳が現れた。この女とは違うクラスだが、体育では合同で授業をする事になってる。

保科はどんな些細な事案でも口うるさく注意してくる。無論、俺に対しても例外ではない。

どうやら、俺がサボるといふ事を前から目を付けてたらしい……



ここでサボってた事……

あなたの担任の先生に報告しとくから！

ウザい女だ……
それと同時にバカな女だな。
こんな人が居ない場所に一人で来るとは……

エロ執行……



俺の存在の認識を忘れさせる…

すると、保科は

『何故この校舎裏に来たのか?』と
脳では一瞬、混乱が生じる。

すぐさま、俺は保科の
おっぱいとマ○コを…

最初は優しく…徐々に
激しく揉みしだく…

むいっ

むいっ

?

えっ?

あ?

もみ

もみ

んん

あっ

暫くすれば、

カラダ全体に

快感が満たされた

この厳格な女は

こう錯覚するのだ。

「私はここに性の処理に
来たんだ…」と

こうなれば、
俺の自慢の肉棒をマ○コに
ぶち込んだ瞬間にはもう
到底、風紀委員とは思えない
エロい声でよがり続ける…

今思えば、これによって
この女のタガが外れて
しまったのだろう…
風紀委員とは言え、
所詮は性欲に勝てない
メスだったな。

ずいっ

ずいっ

その後、保科と俺は
セックスをする事は
なかったが…
噂ではクラスの男子数人と
やりまくってるらしい。
風紀を乱す者と守る者は
表裏一体なのかも
しれない…

